

認知症早期発見に向けた取組(認知機能セルフチェッカー体験) 実施報告

1. 目的

市民が認知機能低下の可能性に早期に気づく機会を提供し、医療受診や相談窓口(もの忘れ相談センター/地域包括支援センター)の必要性について啓発し、つなぐ。

2. 認知機能セルフチェッカーとは

「VR」を利用して認知課題を出題し、「視線だけ」で回答する認知機能を評価する約5分の簡易チェック。検査結果に応じて受診先・相談先を案内。

3. 実施概要

回	実施日/場所	体験者数/内訳		体制/方法
①丹波篠山つなごろうフェスタ2025 (体験ブース)	R7.9.21 四季の森生涯学習センター	33名 男7人 女26人	40代以下2人 50代2人 60代15人 70代9人 80代5人	スタッフ3名。テスト約5分→結果説明・相談約5分(個別)。気づきシート配布、相談先案内。
②在宅医療介護連携推進市民フォーラム (講演前後)	R7.11.30 市民センター	20名 男1人 女19人	60代4人 70代12人 80代4人	スタッフ2名。テスト約5分→結果説明・相談約5分(個別)。気づきシート配布、相談先案内。

4. 結果

①では75点以下(MCIリスク高)が年代に関わらず約3分の1程度みられた。

②では75点以下が70代4人、80代4人。一部に「物忘れ自覚は少ないが、結果の意味が分からない」との反応があり、結果説明の丁寧さが重要と分かった。

いずれも、結果説明時にMCI予防の案内と、医療受診・相談窓口の紹介を実施。

5. 運営上の学び(改善点)

(1) 所要時間

結果説明と受診先紹介を含め、1人あたり15~20分を想定した設営が必要。②では待機列が最大10名程度となり、30分以上待つ方が発生。

(2) 実施環境

通路実施では説明が聞き取りにくい場面あり。パーテーション等で区切るなど環境整備が必要。

(3) 事前説明

緑内障など視野に影響のある眼疾患がある場合、検査が受けられなかったり、正確な測定ができない可能性があるため、事前説明が必要。

(4) フォロー体制

①は氏名未聴取。相談につなぐ場合は、同意の上で一定の属性(氏名・連絡先等)の把握が必要。

6. 今後の対応(案)

混雑対策: 整理券/枠設定/予約等の導入検討

周知強化: 相談先の掲示を統一し、気づきシート活用を継続

記録整備: 相談につなぐ場合の同意取得・記録項目の整理(最小限)

会場整備: 説明環境(遮音・視線配慮)の標準化

窓口常設: もの忘れ相談センター(長寿福祉課)窓口での常設設置とマンパワー